第二十七日目

師　範：８代将軍義政のあとをだれが継ぐか，有力な守護大名の管領家の後継ぎ問題もからんで，大きな対立が生まれました。
細川勝元が中心となって２４か国１６万騎の東軍。
山名持豊が中心となって２０か国１２万騎の西軍。

１４６７年から１４７７年までの１１年間の長い戦いがはじまったのです。
この応仁の乱で，京都は戦乱の舞台となって焼け野原になってしまいました。
このころの守護大名は京都に住んでいたのですが，応仁の乱とともに自分の領地に住むようになりました。そこで京都の文化が地方に広まっていったのです。
京都の人は「先のいくさで…」ということがあるそうですが，それは「太平洋戦争」ではなく，この「応仁の乱」のことをいうという，笑い話のような話しがあります。
それは京都の人の生活の中に流れている，ゆったりとした大きな時の流れを伝えているエピソードです。
その言葉の中に登場する応仁の乱です。

１４６７年　応仁の乱がおこる。

この年を覚えておきましょう。
コン太：こういうのはいかがでしょうか。

「戦国の人世むなしき応仁の乱」

「ひと」は１，「よ」は４，「む」は６，「な」は７，これで１４６７。
お父さんは

「一夜むなし応仁の乱」

と覚えたそうです。
ペン太：ぼくは

「人読むな応仁の乱の悲しい話」

としました。
「ひと」は１，「よむな」は４６７です。
師　範：「ヒトヨムナ」は共通した読み方ですね。
その後の続け方で，漢字が変わり意味が変わります。
いろいろ工夫できるということですね。